2023 年 12 月

『こもろのひろば　こぼれ話』

～郷土の事柄をわかりやすく紹介するコーナーです～

「雲の観察をしていた藤村」

先日、「島崎藤村が１年かけて雲を観察し、それを文章にしたそうだが、その文章を読みたい」との問い合わせがありました。

作品が思い当たらなかったので、まず自館のシステムで島崎藤村・雲と検索をしてみたところ該当する資料がありませんでした。そこで、インターネットで「島崎藤村　雲」と検索したところ『若菜集』に「雲のゆくへ」という題名の作品が掲載されているとの情報がありましたので、『若菜集』を調べてみました。確かに「雲のゆくへ」は、掲載されていましたが、４行の詩で、問い合わせの内容とは違うと判断しました。

国立国会図書館のレファレンス協同データベース（https://crd.ndl.go.jp）でも、同様に「島崎藤村　雲」で検索してみたところ、『島崎藤村事典』に、雲に関わる記述があり、その中に、『落梅集』に雲を観察して書いたエッセイがあるとの記述がありました。『落梅集』は、藤村が小諸義塾の教師として小諸に赴任後、明治 34 年（1901）に発表した第４詩集で、「千曲川旅情の歌」「小諸なる古城のほとり」や、昭和 11 年（1936）に大中寅二が作曲し、歌謡曲としても有名な「椰子の実」など、小諸時代の恋愛詩と旅情をうたう自然詩が収められています。

『落梅集』を確認してみると、「雲」というタイトルの文語体の文章がありました。小諸で観察した空の様子など、季節の移ろいが書かれている作品でしたので、こちらをご案内しました。

「雲」は、文語体で書かれている為、読み進めるのに根気がいりそうですが、雲を主題としながらも、小諸の季節折々の様子が記されていました。藤村は、小諸で雲を見ることの利点を五つ述べています。「春より秋へかけて雨すくなきこと一つなり」「海面を抜くこと三千尺、殆ど筑波の嶺と同じ高さなること一つなり」などが利点として挙げられていました。その他の利点は、ぜひ実際に読んでみてください。

藤村が雲の観察をしていたなんて驚きですわ。小諸は私の生きていた縄文時代からお天気がよくて、雲の観察にはうってつけだったのよ。『落梅集』にはどんなお話が載っているのか、気になりますわ。

こもろのひろばキャラクター
いしがみばんじょさん

【参考資料】
『島崎藤村事典』伊東一夫／編　（明治書院　1982 年）
『島崎藤村全集　第２巻』島崎藤村／著（新潮社　1949 年）
『若菜集　復刻』島崎藤村／著（筑摩書房　1948 年）
『落梅集』島崎春樹／著（春陽堂　1901 年）